

伝統の中の水銀

古くから赤は、神聖な色として、土器や埋葬品の着色に用いられてきた。赤色の顔料には、主にベンガラ(酸化第二鉄)と水銀朱(硫化第二水銀)が使われ、後に鉛丹(四酸化三鉛)も用いられるようになった。重金属の毒性など科学的知識が無かったはずの時代でも、経験的にそれらの使用が生活に支障が無いと認識されていたため、使われ続けていたものと思われる。

●水銀の朱が彩る世界

水銀朱の原料は、「辰砂(しんしゃ)」と呼ばれる天然に産出する硫化水銀化合物を含んだ赤い鉱石で、古く縄文時代から採掘が行われていたようで、三重県や徳島県の遺跡からは、辰砂のすりつぶし用とされる石臼や石杵も出土している。辰砂は、ベンガラの材料となる「鉄鉱石」より鉱出が限られていたため、水銀朱は高級とされ、神社や寺院の装飾の他には漆器や、練り朱肉など高級な用途に用いられている。



●金色の大仏像にも水銀

辰砂を製錬することにより、光り輝く液体の「金属水銀」を取り出すことができる。金属水銀は、他の金属とアマルガムという混合物(合金)を作りやすいという性質を持っている。このアマルガムの使用例として特筆に値するのが、8世紀に建立された奈良東大寺の大仏への鍍金(金めっき)である。高さが15メートルにも及ぶ巨像の表面を金めっきするために大量の金アマルガムが塗布され、そこから水銀を蒸発させるために周囲で火が焚かれたと言われている。大仏殿も同時に建設されていたため、この作業は屋内で行われたことになり、高濃度の「水銀蒸気」が充満した大仏殿内は、非常に危険な状態であったであろうと想像される。なお、現在の大仏は、2度の焼損のち再興されたもので、創建当時の鍍金は蓮花座の一部にわずかに残るのみである。

●環境か伝統か

京都や日光にある神社仏閣では、今も日本の伝統的な手法に則った修復が行われている。水銀朱を用いた塗装やアマルガムを利用した建築装飾品への金めっきなども、その手法のひとつである。もちろん作業員の安全面への対策は十分にとられているだろうが、水銀の毒性がよく知られた現代においては、環境面で水銀を使い続けるのは良いのか、そもそも文化と環境を天秤にかけて議論することが相応しいのか、など難しい問題を抱えているのも事実である。漆器などの工芸品では、「色味」や「風合い」といった、代用品を以って代えることのできない価値を水銀朱は持っており、それを「環境に悪いから」という理由で捨ててしまっよいかという疑問も投げかけられている。



様々な色合いの水銀朱

●何を残して何を変えるべきか

「水銀に関する水俣条約」の規定では、伝統的・宗教的な用途に用いられる水銀使用製品の製造と輸出入は、禁止品目から除外すると明記されており、こういった問題に対しては一定の配慮がなされている。そのため、現時点で水銀朱は廃止の対象とはされていない。一方、アマルガムを用いた金めっきは、それ自身が水銀使用製品ではないため、取り扱いが明確には定められていない。仏像への鍍金は、現在でもネパールなどで行われており、作業員の水銀中毒が懸念されているため、これに新たな規制措置を加えるべきとの意見もある。伝統が全て善とは限らず、文化だからと議論を封印するのではなく、我々は将来に何を残して何を変えていくべきなのか——フラットな気持ちで考えることが求められている。